

北米沖縄県人会創立100周年記念行事・舞台『キング尚巴志』

演出家・平田大「次の世代が次を変える」

今年、創立100周年を迎えた北米沖縄県人会の100周年記念行事が、8月22日から8月30日まで開催される。慰霊祭、祝賀会、シンポジウムなど盛り沢山の内容だが、注目されるのは、8月28日にレドンドビーチ・パフォーミングセンターにて公演される現代版組踊絵巻「キング尚巴志(しょうはっし)」。これは、沖縄からの中高生を含めた53人と同県人会青少年部会員の若いエネルギー溢れる舞台。この舞台の脚本、構成、演出、監修の4役を務める平田大(だいいち)さんが、今月初め、ロサンゼルスで気迫のこもった稽古を行った。稽古後、話を聞いた。

寄って立つべき自分の根っこの大切さ

一初めての稽古を終えて、感想は？

振り付けを覚えるっていうのが本来の目的じゃなくて、実は、“自分たちはウチナンチュ(沖縄の人)である”という自分たちのルーツを考えてもらう取り組みなんだと、今日、見て思いましたね。

正直、今のような文化の継承だと、子供たちにウチナンチュのスピリッツは伝わらないと思うんですね。常に“古いものは古いもの”としか受け止めてないから。僕は“古いものは新しいんだ”という感覚を自分の舞台の中に織り込んで。自分が寄って立つべき“自分の根っこ”みたいなもの、アイデンティティーをすごく大

事にしてほしいと思うんです。まさに、この子供たちには、「アイデンティティーって何だろう？」と問いかけ直す、そういうきっかけになったらいいなって改めて思ったんです。

ネクストジェネレーションを作る

一どういところで、そう感じたんですか？

えーと、やらされてるんですね、「あなたはウチナンチュよ」って言われて…。自分が自覚するっていう作業、問いかけがすごく少ないんだと思うんですよ。「あなたは、ウチナンチュよ」って言われて、次の世代はそれを受け止めるしかない。でも、本当は自分で決めなければいけないと思うんです。ウチナンチュであるのか、ウチナンチュでいいいいのか。

この子供たちには、どうしてもアイデンティティーが二つある。生まれた所が故郷というならば、彼らの故郷はアメリカになっているんですね。僕は、それは全然いいと思うんですよ。「自分は沖縄である」と自覚した新しいアメリカ人が、アメリカの中で社会貢献していくというのが、本来の意味での“沖縄の人の生き方”が繋がっていくこと。

まだ沖縄の地をまだ踏んでいない、「沖縄って何？」って疑問を持っている若い世代の立ち位置の危うさっていうのをすごく感じますね。

「果たして僕らは何ができるのかな」ってい

うところで、8月の100周年というのは、100年をお祝いするだけじゃなくて、「ニューアイデンティティーを作るんだ、ネクストジェネレーションを作るんだ」という確認の場所というか、スター稽古の最後、『レキオ(琉球人)の夢』を唱う平田さん(右から二人目)。若い会員たちはウチナンチュのスピリッツを感じた



この次に会う時は本番。貴重な稽古に熱が入る平田さん(左)＝北米沖縄県人会会館にて

トラインの場所になるといい。

100年前の人たちの情熱に伝えたい

一この公演を、一度とりやめたんですか？

団体としては、インフルエンザもあったり、経済的な不況の理由があって、行かないという判断を5月20日にやったんですけど、北米のみなさんが、すごく待ち望んでいること、それから、4月に僕がみんなと約束したこと、「必ず来ます」ってこともあったので、僕が中心となって声をかけて、52名、エントリーがありました。

今、自分たちで(渡航費用の)募金活動をやっています。子供たちがね、「北米に行くんだ」って言ってね。この情熱は、100年前に海を渡ってきて、ここで根っこをおろすぞって言って頑張ってきた人たちの情熱に伝えたいっていうことだと思うんですね。

最後は感動して、共感して、なんか“One Team, One Family”で、沖縄の心ってそうだよって確認できたらいいな。

僕も今、沖縄で中学生と高校生と舞台を作っているんですけど、沖縄でも、ハワイでも、北米でもそうだけど、「ネクストジェネレーションどうするか」つつのが、みんな真剣に悩んで考えていることなんですよ。でも、どこも答えを出し切れてないんですよ。

そういう面では、少なからず僕が沖縄で舞台

をやっているメンバーは、舞台を通して、自分たちの根っこを考えて、自分たちの誇りを持って生き方を自分で決める。そういう生き方ができるネクストジェネレーションが、いっぱい生まれてきて。彼らにとって海を渡るって言うのは大きなチャレンジだし、そういうメンバーと出会うことで、今アメリカで頑張っているメンバーに大きなインパクトがあるんじゃないかな。それが、大きな100周年のプレゼントっていうか、記念として生き方が残っていくっていうのは、一番、僕はいいんじゃないかと思う。

沖縄とは、故郷とは、根っこだと言う平田さん。「自分の生まれた島とか町に誇りが持てる人は、どの地域どの国に行っても、そこに根っこをはって頑張れる」。根っこの大切さを痛感しながら平田さんは、“Next Generation Changes Next Generation(次の世代が次を変える)”というコンセプトで活動を続ける。「今、あるものを渡すじゃなくて、次を作っていく。そういうものをアメリカでもやっていきたい」と、力強く語った。

＝Tomomi Kanemaru

現代版組踊絵巻「キング尚巴志」：平田大脚本。琉球王朝建設の父、尚巴志の生き様をベースに、空手、獅子舞、琉球舞踊、エイサー、ダンス、芝居、歌、演奏などを織り交ぜた新たな構成の「現代版組踊絵巻」。

北米沖縄県人会：www.oaamensore.org

平田大(ひらた だいいち) プロフィール・南島詩人・演出家。2005年に「教育で地域を、文化で産業をおこす社会起業家(ソーシャルアントレプレナー)」を目指す「有限責任中間法人 TAO Factory(タオファクトリー)」を設立。2005年より那覇市芸術監督を務める。18歳で「南島詩人ひとり舞台」という詩の朗読の舞台を始める。28歳の時、「中高生の舞台を作らないか」という誘いがあり、それ以来、舞台の演出を各地で行う。

